

これたかしんのうでんせつ 惟喬親王伝説（太田市西長岡町の御所遺跡）

今から1100年ほど前の平安時代。

京の都において、文徳天皇の第一皇子、惟喬親王が誕生した。

幼児から聡明であり、次期天皇として期待されながら育ったが、宮廷内における権力争いの結果ついにならず、太政大臣藤原良房の推す惟仁親王（のちの清和天皇）が皇位を継承する。

このため惟喬親王は、常陸太守及び上野太守などの官職を得て、関東にわたらせたもう。同行する宮家ゆかりの人々と駒を進めるうちに、都を偲ぶお気持が高まり、しばし上野の地にお留まりなされる。

その際、親王の御所としてふさわしい場所を求めて、近習があたりを検分するにおよび、ついに水清く、空気清浄にして風光明媚な現在の太田市西長岡地内を、その地と定められる。

北側の山を御所山、そこを水源に流れる川を加茂川、あたりの山を愛宕山、さらに東山と、都に縁ある名を付けられたのも床しいことである。

さらに居住区として京八坂を中心にすえ、都を模した南北方向、方形のなわばりを行なって整備し、長岡の宮と称した。

その後、天皇にも成り得た貴種でありながら、権力には一切執着しない清廉の人柄ゆえに出家され、素覚と号して京都近郊の小野に隠棲さる。

親王を慕う人々は多く、古今和歌集の六歌仙として知られる在原業平もその一人。

桜花散らばらなむ散らずとてふるさと人の来ても見なくに（古今74）は、惟喬親王の和歌。

親王は洛北にあって53才のご生涯を閉じられるが、ご遺徳をしのぶ西長岡の人々は、親王に同行して居を構えた周藤氏と共に、遺跡を守り神事を継承して今日に至る。

また、伝承によれば、山あいに住む民の為に、木地師に命じて自ら発案したろくろの技を伝えたとされ、全国各地に御名を残される。

太田市北部、八王子山系に抱かれる西長岡に、かくの如き畏き、宮様が居住したことは、大いに顕彰されて然るべきであろう。

西長岡住民センターから、愛宕神社をへて加茂川を少し上ると、惟喬親王宮と掲示された朱塗りの鳥居があり、その奥には菊のご紋章をいただく祠が鎮座まします。

尚、天神山丘陵は大古墳群である。

<西長岡山麓に点在する、惟喬親王ゆかりの史跡>

京八坂神社、愛宕神社、惟喬親王宮、御所跡、御所山見張り台、御影井戸、正一位三尾稻荷社山皇様、御所稻荷様、熊野神社、加茂川の滝、天神様、菅原神社、お諏訪様、太神宮様八幡宮、高尾山様、稻荷明神、植木地藏尊、弁天様、水神様、若宮八幡社、浅間神社、